

みんなくでの学術手話通訳養成事業の取り組み⑥



国立民族学博物館日本財団助成手話言語学研究部門

—通称：みんなく手話部門/SiLLR (シラー) —

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/>

特任教授 飯泉 菜穂子

これまで事業を展開してきて感じていること

これまでの連載では、みんなく手話部門学術手話通訳研修事業が今どのような研修や講座を展開しているのかをご紹介しますでしたが、このあたりで、この2年間…厳密に言えばみんなくに手話部門 (SiLLR) が設立される以前のプロジェクト時代からの6年間の取り組みの中で、いえ…もっと言うならばそれに先立つこと十数年間の手話通訳養成校の教員時代から、「質の高い手話通訳の養成」を

目指すものとして、私が感じてきたこと、現に今も強く感じていることをまとめてみようと思います。それは、二つのことです。一つは、日本における手話通訳養成システムにもっとも「言語通訳としての手話通訳」を育てるための理論や仕組みの導入が必要であるということ。もう一つは、言語通訳としての手話通訳を育てるためには、高等教育機関における養成が不可欠だということです。

個人 (私) を犠牲にし能力の限界を超えてまで責任を果たそうとする職業

そのお話の前に、私がかつて手話通訳養成校の教員だった時のエピソードをご紹介します。学校の教員というのは、学内外の様々な研修を受講する機会が多いものです。ある時、学外の研修に参加して帰校された学校長が、私の顔を見るなりこんな質問をされました。「飯泉さん、今日の研修でね、日本で“個人生活を犠牲にして、自分の能力の限界を超えてまで職責を果たそうとする人のとても多い職業”として二つの例が紹介されたんだけど、何だかわかりますか？」私は少し考えて (学校長が参加した研修会は現任教員を対象にしたもの…ということを大いに意識し

て) 答えました。「ひとつは教員でしょうか？」
「正解です。もう一つは？」いろいろと思いを巡らしましたが、私にはもう「一つ」を選ぶことが出来ませんでした。集団への同調意識が強いとされる国民性、職業人と私人という立場を天秤にかけた時に職業人たることを優先しなければならぬ社会的な圧のようなものを考えると (いわゆるワークライフバランスの大切さが強調され始めたのは、そう古い話ではありません)、どのような職業であれ、多かれ少なかれ誰もが個人 (私) を犠牲にしているのではないか…という気持ちでいました。「なんでしょう…」「手話通訳だそうですね。」

手話通訳はとても頑張っている

学校長の答えは、いろいろな意味で衝撃的でした。まずは、そのような研修の場で手話通訳がきちんと「職業」と位置付けられ理解されていることに (良い意味で) 驚きました。手話

通訳は、経済的自立という点では決して十分な処遇が保障されているとは言えませんよね。2018年3月1日現在、手話通訳士名簿に登録している人は3,601名です。その、士資格保持

者に限ってみても、手話通訳一本で生計を成り立たせている人が、いったいどのくらいいるのでしょうか？

私個人は、手話通訳は、どんな世界でも通用するような有為な人材が、一生をかけて追及する価値のある仕事だと思っています。しかし、残念ながら現状では未だ未だそういう地位を占めるに至ってはいないのではないかと、その大きな要因の一つとして、経済的な保障の低さがあるのではないかと。私が奉職していた手話通訳養成校が、学生定員を充足することが困難な状況に追い込まれたことで学科閉鎖という経営判断に至ってしまった大きな

要因もそこにあつたと思っています。

にも拘らず、今や世間的にはきちんと (ボランティアではなく) 「職業」として認知されているのか…ということにうれしいショックを感じました。そして、学校長の答えを聞いて「ああ、本当にそうだなあ。どんなに心身の限界を感じていても、そこに通訳ニーズがあつたら自分がなんとか対応しようと思ってしまふ…そういう人が手話通訳には多いし、そういう人たちの無理に無理を重ねた頑張りの上にいるんなことがなんとか成り立っているんだよなあ…」と、いたく納得したのでした。

現役手話通訳者の方たちと共に学んでみて

研修や、SiLLR 提供の関連講座…殊に通訳技術研修系の講座で現役手話通訳の皆さんとご一緒する中で、時折、上記の学校長とのやりとりを思い出しています。参加してくださる方は皆さん、手話通訳技術習得・ブラッシュアップに高い意欲を持っていらっしゃる。現場で精一杯 (以上) に頑張っていくために必要なことと実感されていることがヒシヒシと伝わってきます。

これまでの SiLLR の研修は「地域等で活動中の現役手話通訳の方たちを対象に」学術案件対応に必要な諸要素を集中的に学んでいただくことによって、学術領域に強い通訳者に

なつていただくということを基本的なスタンスとしてきました。既に現場において「習熟した手話通訳として高い通訳技能を発揮している人達」に、更に付加価値をつけていただき、対応できる領域を拡張していただくことを目標としてきたわけですが、SiLLR のミッションである学術という専門領域に特化した研修の実施と並行して、もっと基本的な、言語通訳としての翻訳技術、現場でのデマンドコントロールやふるまいといったところにも学びの時間を割いていく必要があるのではないかと感じています。

新年度がスタートしました

SiLLR 学術手話通訳研修事業2018年度の研修員募集中です。先般ご紹介させていただいたこれまでのスクリーニング方法を大幅に見直し、応募していただきやすい内容に改変しています。申込締切が5月7日 (月) 17時です。このエッセイ掲載号 (5月号) が皆様のお手元に届くのは締切を過ぎてしまうかと思いますが、是非、最後にご紹介する URL を

ご覧いただき、新しい募集要項内容をご確認いただければと思います。私たちの部門は、少なくとも2021年3月までは継続して事業展開をしてまいりますので、来年度・再来年度の応募ご検討や、皆様の周りにいる若手手話通訳の方達への情報提供に活用していただくと幸いです。

国立民族学博物館学術手話通訳研修事業新規研修員募集要項 URL
http://www.sillr.jp/tsuuyaku/2018_boshuu.html